

# 夾竹桃

森岡 正作

奥肥後に

父母なくて土蔵残れる帰省かな  
帰省子のまづ大の字の青畳  
奈落出て黒子に汗の滴れり  
日盛の列に釣られて列につく  
山の子に潮騒届く貝風鈴  
告白の日なり白靴選びをり  
吾知らぬ焦土の匂ひ夾竹桃

また鯛の季節がやって来た。夕刻に鳴くその声は、一日の疲れを癒し穏やかな気持ちにしてくれる。登四郎先生の句集『幻山水』の「肥後五家荘」の項に、〈奥肥後に死ぬ鯛か声うるむ〉(鯛や球磨も奥なる岩梯子)〈入吉の灯恋ひ鯛降るばかり〉と、鯛の句が三句も載っている。どの地名も山国を思わせるが、峡の深さには鯛の音色がよく響くのであろう。もう古い話であるが、田舎の無人の我が家に帰ったことがあった。さすがに物音ひとつしない家は寂しいもので、庭の樹木を眺めていると、〈秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる〉という歌が浮かんでくる。そんな時に折しも鯛が鳴き始めた。しばらく聴いているとその音色は、夕方の餞色に染まった十数戸の小さな村を、かなかなと鳴る数珠で巻き込むかのように聞こえ、大げさに言えばここは浄土かと思えるのであった。

もう一度先生の句に戻れば、先生は日本の田舎の素朴な暮らしを愛しつつ、その未来を見据えた上で、滅びの美を詠んだのではなからうかと思う。